HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	内村鑑三の人間発達援助思想
Author(s)	間宮, 正幸
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 146, 157-182
Issue Date	2025-06-26
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.146.157
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95607
Type	departmental bulletin paper
File Information	09_1882-1669-7.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

内村鑑三の人間発達援助思想

間　宮　正　幸*

【要旨】北海道大学創基150年を迎えるにあたり，札幌農学校2期生である逸材内村鑑三（1861-1930）の人間発達援助思想の形成を「今日の教育学の課題」という観点から論じた。まず，内村の人と思想に関するこれまでの論及を整理し，次いで，人間発達援助思想の錬成過程を理解するという立場から，内村の「成長の危機」（エリクソン，E.H）を，艱難を抱えた家庭環境問題まで遡って検討した。初婚の破綻から24歳で渡米し，偶然関わることになったエルウィンの知的障碍児養育院での「看護人体験」が，帰国後6年間に及ぶ熟慮の末の『求安録』を経て『流窴録』として刊行された。それは，自己内省と自己洞察を得て看護人「経験」としての記録になり歴史的な教育・福祉の書として位置づくことになった。彼のuniversalな世界観，人間観，教育観に基づく人間発達援助思想は「後世への最大遺物」の一つであるに違いない。

【キーワード】内村鑑三論の再考，エルウィン看護人体験，『流窴録』の再評価，人間発達援助思想の形成，universalな世界観・人間観・教育観

はじめに

2026年，北海道大学は創基150年のAnniversary Yearを迎える。すでに，各部署で記念行事が開催されている。顧みれば，1949年に国立大学設置法が公布・施行されて新制北海道大学教育学部が設置されているから，教育学部もすでに70年余の歴史を有することになる。そうであるならば，創基記念にふさわしい参加の仕方というものがあるのではないか。

そのように受けとめた場合，札幌農学校開学期に輩出した逸材の生涯や業績を21世紀の「今日の教育学の課題」という観点から問い直すことも試みられてよく，それには歴史的意義があるだろうと筆者は考える。むろん，佐藤昌介，新渡戸稲造，内村鑑三，宮部金吾，廣井勇をはじめとする卒業生は折にふれて幾多の刊行物で紹介され耳目を集めてきた。その数たるやおびただしく，もはや語る言葉も見当たらないほどであることは承知している。しかし，今や，本学の<新渡戸カレッジ>事業の推進に伴って新渡戸稲造の精神を理解しようとする日常的な機会がある。また，内村鑑三（1861-1930）については新しい観点から「評伝」や「人と思想」の再考を迫る出版の機運も高まってきている。それらはもはや偉人伝をなぞるというのではなく新しい動向といってよい内容である。

この機会に，筆者は内村鑑三の人と仕事を「教育・福祉」という視野から捉えなおすことを試みたいと願っている。というのも，若き日に内村の非戦論・平和論と人権擁護の思想に出会い，さらには彼が障害者援助実践の先駆けであったという事実を知って，その跡を追うが如くに人間発達援助者としての生涯を送ってきたからである。とはいえ，およそ半世紀のあいだ関心を持ち続けながらも距離をとってきたことも事実で，それは何ゆえであったかを

* 北海道大学名誉教授
DOI：10.14943/b.edu.146.157

見極めたい。

内村に初めてふれたとき,「かれは職業的な科学者としての道をはやくから断念しなければならなかった。しかしその生涯の終わりにいたるまで,自然科学に対して新鮮な興味を持ち続けた。その点で宗教のみを問題にした他の明治のキリスト教の先覚者とも異なるのである。(中略)このように内村が,はじめから科学と宗教を同時に自己の内奥の問題として取り上げたことから,内村における西欧文化受容の独自の深さが由来するように思われる」(関根,1967)という指摘に頷いたのはいったい何ゆえであったか[(1)]。その自分史的な意義をも再考しつつ,内村の仕事を「教育・福祉」の問題として論じて今日の課題につなげたい。

また,北海道大学教育学部との縁というものについても一言あってよいかと考える。教育学部創設期の1952(昭和27)年,教育衛生講座と特殊教育講座とが設置され精神科医の奥田三郎初代教授がいわれあって双方の運営を担った。また,同年に,留岡清男が生活教育講座教授として着任した。留岡は,教護院北海道家庭学校創始者でキリスト者留岡幸助の四男として校長も兼務していた。奥田や留岡は,戦前に,わが国の教育史を飾る教育科学研究会を結成して教育・福祉分野の実践と研究の先端を担った歴史的人材である。医師で子どもの研究者であった奥田は教育学部「最終講義」の締めに,「臨床家はせめて地の塩として役立ちたい」との「遺言」とも思える言葉を残している[(2)]。筆者には,彼らは内村鑑三につながる一筋道を歩いた先覚者ではないかと思える。そのようなつながりもあるかと考えるので,遥かに内村鑑三の「教育・福祉」の思想を辿ろうと思う。

1　内村鑑三の人と思想

1.1　内村鑑三論のこれまで

現在の北海道大学学生・教職員にとって,札幌農学校創基時代の伝説的人物である佐藤昌介,新渡戸稲造,内村鑑三,宮部金吾ら一期生,二期生の「人と学問」はどのように位置づけられているのだろうか。むろん,人口に膾炙した大先達と期待する向きもあるだろう。だが,おそらく現実はそうではないのではないか。とりわけ内村鑑三はキリスト教思想家・宗教家・評論家との先入観もあって,新渡戸のように積極的な位置を確保していないし,おそらく実像が知られていない。

過去に,内村を紹介する実に多くの書物が上梓されている。戦後に限って振り返ると,矢内原(1962)が「今や日本において内村ブームの兆候がある」と記したことがあったけれども[(3)],30年の年月を経た小原(1992)による評伝は,すでに,内村を紹介する矢内原忠雄や南原繁の本も読まれないし売れてもいないことを嘆いている[(4)]。集大成の『内村鑑三全集』は1980年代に出ている。世紀をまたいだが,50年以上にわたって内村資料を集録し『内村鑑三全集』の編集や『内村鑑三日録』の労をとった鈴木(2012)[(5)]と鈴木(2024)[(6)]は,内村の実像に迫る今日ふれえる最適の案内書であろう。また,近年,立て続けに内村論を上梓した批評家の若松(2012)[(7)],若松(2016)[(8)],若松(2018)[(9)]の場合は,内村における宗教と霊性の意味と役割の再考に焦点があてられている。その中で,『内村鑑三―悲しみの使徒』(2018年)では,本稿でふれることになるエルウィンでの8か月間を,教育の目的という観点から紹介していることが目を引く。

ここで,北海道大学学内構成員による内村の人と思想にふれた公刊物があるのでめぼしい

作品の著者名（肩書は公刊当時）と書名を掲げて回顧しておく。

法学部教授（政治思想史）の松沢弘陽編『日本の名著38内村鑑三』(1984年）は，宗教と信仰の人というのではなく内村を近代日本の人権思想・政治思想から捉えなおした出色の一冊である。「近代日本と内村鑑三」なる73頁にわたる優れた解題がある[(10)]。蝦名賢造著『札幌農学校―日本近代精神の源流』(1991年）は北海道大学予科教員の経験がある経済学者の著作で，副題の「日本近代精神の源流」ということばはしばしば引用される[(11)]。農学部教授（農業経済学）の太田原高昭著「内村鑑三と新渡戸稲造」(2004年）は学生にむけた簡潔な講演録で，明治維新から帝国主義国家日本に至る過程での，札幌農学校出身者である宗教者と教育者の活躍をいきいきと語っている[(12)]。「明治政府によって『暗い昭和』につながる重大な布石が打たれようとした瞬間に，最大限の勇気をもってその前に立ちはだかった日本人が居たということを，今日の私たちは世界に誇ってよいでしょう」と太田原はいう。手際よい明解な導入文なので以下に引用したい。この論考は，さしあたって学生に薦めたい一番の読み物といえる。

近代精神の源流としての札幌農学校

元東大総長の矢内原忠雄は岩波新書のベストセラー『余の尊敬する人物』の中で次のように述べています。「内村鑑三と新渡戸稲造とは私の二人の恩師で，内村先生よりは神を，新渡戸先生よりは人を学びました。両先生は明治初期の札幌農学校で同級の親友でありましたから，その意味では私も札幌の子であります。」この二人が奇跡のように出会って同級生となった札幌農学校とはどのような学校だったのでしょうか。

初期の札幌農学校はこの二人の外にも日本の近代化にかかわった優れた人物を輩出していますが，この学校は，学士号を授与出来る大学としては東京大学より1年早く，わが国初の大学でした。明治のごく早い時期に，しかも蝦夷地といわれた北海道という僻遠の地に，それまでの日本的伝統から解放された近代精神が育っていったのです。言うまでもなくそれが初代教頭のクラーク博士に由来することは皆さんもご存じでしょう。

ウイリアム・S・クラークはアメリカの南北戦争を戦った北軍大佐，マサチュセッツ農科大学長であり，熱心なプロテスタンティズムのキリスト者でした。いろいろないきさつがありましたが，明治政府は，結果としてこうした人物に学生の知育，徳育，体育のすべてを委ねたのであります。これが当時の日本においていかに特別のことであったかは，キリスト教がこの時点ではまだ事実上国禁の宗教であったこと一つとっても分かるでしょう。

南北戦争は奴隷制を打破した民主主義の勝利でありました。マサチュセッツ農科大学はアメリカでも最先端の学府であり，札幌ではそのカリキュラムそのままが英語で学生に講義されました。クラークはその全人格をもって学生を教育し，学生たちは彼を通じて民主主義，国際主義，科学精神，そしてキリスト教を砂地の水のように吸い込みました。そしてこれらの諸要素こそが西欧近代精神の骨格をなすものであったのです。内村と新渡戸はこのような豊饒な土壌に咲いた大輪の花でありました。

（太田原，2004. Pp.134-135.）

次いで，文学研究科留学生であったミシェル・ラフェイ（Michelle La Fay）の『なまら内村鑑三なわたし―二つの文化のはざまで』（2011年）がある[13]。いったんアメリカに戻って精神病院での勤務体験を盛り込んだ著書で内村の実像に迫っている。出版当時の専攻は「コミュニケーション学」とのことだが，本稿の主題である内村の障害者支援体験を重ねた稀有な論考といえよう。北海道大学医学部出身で精神科医の上野武治には「内村鑑三のエルウィン知的障害児学校における『看護人』体験の今日的意義」（2012年）がある[14]。さすがに精神医学者の鋭い観察眼がある。また，獣医学部教授藤田正一（2013）の『日本のオールターナティブ』でも内村に詳しくふれている[15]。

爾来10余年を経たが，現下，これらの著作は北海道大学で読者を得ることができているだろうか。筆者は，在職中（1999年～2016年），全学の教職科目の授業で，毎年必ず「札幌農学校：内村鑑三の教育思想―障害児者との出会い」を講じた。しかし，それも百数十名の聴講生にわずか一コマだけであるから彼らの脳裏をかすめることがあったかどうかはこころもとない。こうして諸般の事情から察するに，1962年に新千円札の肖像候補者にさえあげられた内村鑑三とは何者かを入門書のごとくに一から紹介しておくべきかと考える。まず，筆者が生涯ではじめて「内村に出会った」と思った一文（関根，1967）を掲げる[16]。時代の勢いを感ずるが，これほどまでに内村を適切に紹介する書き出しは今もってまれかと思われる。

序にかえて―内村の意義

内村鑑三は1861年（文久元年）に生まれ。1930年（昭和5年）に世を去った。かれの生涯は，日本が長い鎖国の状態から離れて，徐々に西欧の文明を吸収し，近代国家としての歩みを開始し，やがて，外側から見れば，近代世界における最初の強大な東洋の大国にまで発展した時期に当たっている。

内村は若くして，札幌農学校で科学と宗教を通じて西欧文明の真髄に接し，さらに4年にわたる米国留学によって，東西の文化の日本における接触の意義を深く洞察した。農学校時代のかれの親友，新渡戸稲造の場合と同じく，内村も西欧の文化を深く日本に移し植え，日本の真価を正しく世界に知らせることを，はじめから生涯の使命として自覚したのであった。内村は若くして自然科学者としての卓抜な才能を示したが，かれは近代科学の方法と精神を学んで，この方面から西欧文明の真髄を深く体得した。しかし内村における西欧文明の受容の特異性は他の多くの明治の先覚者の場合と違っていた。それはかれがただ西欧の科学を問題にしただけでなく，科学と同時に西欧の宗教を自己の問題として取り上げ，それを生涯かけて追及したことである。

（関根，1967. p.3）

筆者は，医学への進路を絶たれて，1970年代に偶然この内村を描いた一文にふれた。よくはわからぬままながらいくらかの衝撃を覚えたことである。科学探求への憧れと人間のこころの問題，自己形成という問題に関心をもった者が探し求めた先人の一例であった。次いで，「序にかえて」にはこうあった。そして下線を引いていた。

われわれは内村の問題を具体的に科学と宗教の問題から見てきたが，すべての問題の背景に内村の強烈な日本人としての自覚がある。かれが西欧のすぐれた科学と宗教に接して，これを深く正しく受容しえた最後の根底は，その日本人としての確固たる主体性にあったというべきである。このような主体性はかれが幼い時からその中に育った日本の儒教・武士道の伝統によって深く養われたのであった。

（関根，1967. p.5）

城下町育ちの名折れであろうけれども，「儒教・武士道の伝統」に親しみを抱いた。そして，しだいにその事実が意外に内村の下地であることに気づくことになる。本稿のさいごでこのことにふれる。

しかしなにより，「Ⅰ.若き内村」の章の第2節に「魂の戦い―農学校卒業から渡米，帰国まで」があり，「渡米・白痴院看護人」の項目があって驚き入った。筆者が医学を志したのは生活体験から「障害」をもつ人々の支援という目標があったからだが，内村鑑三という明治の人のこの意外な体験に驚いたのである。なにしろ編著者は，日本を代表する旧訳聖書学者の関根正雄である。キリスト教思想家・宗教家としての内村の紹介が詳細であるのは当然のこととしても，初婚の浅田たけとの離婚，そして，アメリカ留学が挫折に満ちた人生のゆえの留学であったことも記されていた。さらに，関根は，「渡米・白痴院看護人」の項で内村のフィラデルフィア州エルウィン（Elwyn）での施設体験を記述していた。以下にそのまま引用する。早い時代であるうえに，かなり正確な紹介である。これが1967年発行の書籍に掲載されていたゆえに筆者の進路が定まっていく。すなわち一篇の書物が若者の進路選択を後押ししたわけである。1970年代前半といえば，日本では滋賀県立近江学園のキリスト者糸賀一雄や心理学・教育学の田中昌人（近江学園・京都大学）らが提唱した「発達保障」という障害児支援の「思想と科学」が提起され一気に普及した頃で，筆者の内側では書物で知りえた内村の場合と合流していくような感覚があった。

1884年（明治17年）11月24日朝，内村は目指すキリスト教国アメリカに到着した。サンフランシスコ上陸後7昼夜かかってアメリカ大陸を横断し，清教徒の地ニューイングランドに向かった。

フィラデルフィアに到着した内村は，旅費だけ工面して渡米した流竄の旅とて金銭の余裕なく，ただちに雨露をしのぐ場所を探さねばならなかった。かれは間もなく，フィラデルフィア近郊エルウィン村の白痴院院長ケルリン博士に「ひろい上げ」られた。すでにクリスマスも近づいたころ，ケルリンは内村を親切にもてなしてくれた。かれは内村の境遇を聞いて深く同情し，当白痴院で働くように強くすすめてくれた。こうして内村は年明けて1月1日から大学の新学期が始まるまで，白痴院看護人として慈善事業に身を投ずることになるのである。

内村の慈善事業への関心は札幌時代からのものであろう。結婚少し前，監獄事業に一生を捧げたジョン・ハワードの伝記を読んで感激したことは，それに一層拍車をかけたと思われる。「実行的慈善事業に顕るるキリスト教の結果をその本国において見る」ことを渡米目的の一つに掲げた内村は，白痴教育に身を投じた最初の日本人であり，それを日本に紹介した先駆でもあった。そしてかれは院長ケルリンから実際的慈善とはいか

なるものであるかをつぶさに学ぶことができたのである。

（関根，1967. p.38）

1.2　内村鑑三論のとらえなおし

筆者は，過去に，内村鑑三や心理学・教育学の城戸幡太郎（北海道大学教育学部初代学部長）の足跡に導かれるようにして治療教育学・臨床心理学を修め，生涯の大半を障害児者支援・家族支援，および成人精神科医療に従事してから北海道大学に着任した。このような活動を，今日では人間発達援助と表現しているが，少なくとも筆者の場合にはその出発時点で内村の思想の影響を受けていたことは間違いない。しかし，結局，「人生論，宗教論，文明論，戦争と平和論，教育論，職業論，環境論に至るまで，後世の世界に鮮烈な影響をもたらす生き方と思想が見出される」（鈴木，2012）というのが内村の遺産であるとすれば，肝心要とみなされてきた宗教論の世界に深入りするには至らなかった[(17)]。

むしろ，内村に関心をもってからちょうど10年ほど経ったときに，先述の北海道大学法学部教授の松沢（1984）による，近代日本の人権思想・政治思想から捉えなおす一冊に出会って納得がえられた気がしたものである。むしろ，そのことが，長きにわたって人間発達援助の仕事に従事することに貢献したのではないかと今の筆者はとらえる。子どもの権利や障害者の権利などを学んで広い視野から関心を広げ，現実の制度的な困難の克服に立ち向かうことが大事なことであったからにほかならない。

「解題」に続けて掲載された松沢自身の新訳「余はいかにしてキリスト信徒になりしか」は，表題こそ同様だが従来の訳文と異なり名訳の印象が強かった。内村鑑三は，これをまず“HOW I BECAME A CHRISTIAN: OUT OF MY DIARY”と題して英語で書いた[(18)]。松沢訳が出るまでは，内村に続くものがそれぞれ独自に邦訳したものが流布していた。ところが，松沢の訳文の本文においては「私が書こうとするのは，私がいかにしてキリスト信徒になったか，であって，なぜなったかではない」というふうに，冒頭の「余」を「私」としたのをはじめ文体が異なった。従来の訳文では内村鑑三という偉大な信仰者をあらかじめ遠くに置いて拝んでしまうような文体に思われて敬遠していた。このとき，先に引用した関根（1967）の一文，「その点で宗教のみを問題にした他の明治のキリスト教の先覚者とも異なるのである」が思い起こされたことである。すなわち，宗教者としての自己確立の物語としてのみ読むのではない，時代と社会に生きたという客観性ないし全体性・総体性（totalité）があるかどうかということにかかっている。筆者自身の青年期には心理学的な自己分析も求められていたのだが，松沢が編んだこの一冊によって自分がなにゆえ「内村鑑三と出会ったと思った」か，それを振り返る手がかりがえられた。たとえば，収録されていた『求安録』，『地人論』，『小篇』の11論考には聖書からの引用のみならず仏教的素養や俳句の引用もあって，キリスト教の人というだけではない教養を授かった。さらには，家庭における親子関係の問題を，鑑三の母方祖母，母ヤソ，父宣之を書いた箇所（第一章「異教」）を松沢訳で読むと，むろん具体的な内容は置き換えてのことだが，わが身に迫るようなところがあった。内村の家庭は一様簡単ではなく，複雑な有様であることが伝わってきた。

> 母方の祖母は，この正直な節制家にふさわしい伴侶だった。彼女は働くために生まれた。彼女にとっては生くるは働くことなり（vivere est laborare）であって，40年の間，

かよわい女性が働けるかぎり働いた。50年，寡婦を通し，五人の子をわが手ひとつで育て教育し，この間一度でも，隣人をあざむいたことも，借金をしたこともなかった。（中略）母は祖母からこの仕事狂（マニア）を受けついだ。彼女は，働いてさえいれば人生のどんな苦労も悲しみもわすれる。母は，生活が苦しいおかげで，憂うつになどなっていられない人種の一人である。その小さい家族は彼女の王国であり，どんな女王もかなわぬほどに，この王国を治め，洗いきよめ，養う。

（中略）

父は立派な儒者で，聖賢の章句をほとんど誦んじていた。当然に，私の幼いころの教育も，儒教の立場でなされた。私には中国の聖賢の教えの中でも徳治の格率は理解できなかったが，その全体を誦んじる心は心に深くしみこんだ。

（松沢訳，1984.「異教」p.84，p.86.）

その当時，すでに病院で生老病死の心理臨床に歩みだしていたから，内村の宗教論だけでは実際の援助活動の頼みにはならないこと，また，彼自身の精神病理も範疇にいれるのがよいと理解するようになっていた。内村の出自の家庭におけるわずらわしい両親との関係などは省略してはならないことになる。これには，当時，「甘えの構造」で知られた土居（1982）の客観的な論文の影響が大きかったろう[(19)]。むろん，さまざまな見方や評価があるだろうが，つまりは内村鑑三をキリスト教という宗教的思想に縛りつけて理解するだけでなく，類まれであるにしても人間の生き方の一例として多面的にとらえねばならないということであった。

内村の研究に半世紀を費やしたという先述の鈴木（2012）は，「ここにきて，ようやく基礎作業を終え，自分なりに内村鑑三の人と思想を述べる時を迎えたように思う」（「はじめに」）と述べて「内村鑑三が，近代日本人としては，独立した自由な，類いまれな精神の持ち主であった」ことを4点，丹念に記述している。一部を省略せざるをえないがここに掲げる。

第一に，生得的ともおもわれる要因として，人一倍の几帳面さ，ある意味での偏執的思考があげられる。（中略）常に思想の対立に踏み込み，それを深める傾向が顕著である。

第二は，札幌農学校で学び，自然科学者として習得した「実験」的生き方である。人生において遭遇する数々の失敗を「実験」として克服し，それを糧として新しい人生を切り開いていく。このとき，失敗した経験が重層的に積み重なるところが，内村の大きな特徴である。この重畳性は，第一の特徴として挙げた思想的な対立の克服にもあてはまることであろう。「実験」のなかでは，最初に記したように身近な死との遭遇が際立ち，そこをくぐり抜ける経験が，いわゆる「死と再生」をおもわせる。

第三は，自然（天然）志向である。それは環境的要因に負うところが多いと思われるが，超越的なカミの声さえも自然の内に認めるという独自な思想をもたらしている。したがって自然は，よく西洋的思想の所産といわれるような，人間の利用価値のみの対象ではない。そこには人間と同じ被造物として，苦痛に「うめき声」を発する自然がある。ここから環境問題に対する先駆的発言が生じる。

第四は，ナショナリズムである。このことには，素朴なナショナリズムから，カミにより日本に与えられた使命という考え方に至るまで変化はあるものの，終世変わらず，その色どりの薄まるときはない。これをもっともよくあらわす言葉が，生涯にわたるモットー，「二つのＪ」（JesusとJapan）である。

さらに,「内村鑑三研究七十年」と語るに至った鈴木（2024）は『内村鑑三　問答』で生身の内村の実像を描こうとする[20]。全24の「問答」のひとつに「19　福祉施設で働いた経験は活かされたか」がある。これまでも，内村のエルウィン体験にふれた文献はあったが，こうした問いはあまり目にしたことがない。筆者が年来あたためてきたテーマそのままであるので驚いたことである。そして，この観点から本稿の主題に接近することにしたい。鈴木はこのように内村を紹介するのである。

> はじめの頃は，嵐に抗してひとり立つ内村にひかれたが，自分自身年齢を重ねるにしたがって，しだいに内村自身のもつ弱者に対する視点の方に，より多くの共感を覚えるようになった。いわば，ヒーローとしての内村でなく，同じ人間としての内村鑑三である。
>
> 内村は，アメリカでは，まずエルウィンの知的障碍児の養育院ではたらき，知力の弱い児童に接した。その後，アマスト大学をへて，続いて学んだハートフォード神学校は中途退学したために牧師としての資格を取得できなかった。その結果，教界では無教会すなわち弱者として社会に立ったといってよい。
>
> （鈴木，2024.「序に変えて」）

2　内村鑑三の人間形成

2.1　アイデンティティの形成

こうした「同じ人間としての内村鑑三」を理解するためにも，次に，従来の評伝や伝記から少し距離をとって，筆者が専攻してきた臨床心理学や教育思想の形成という観点から内村鑑三の生涯を捉えてみたい。「内村鑑三の人間発達援助思想」を語ろうというからには，自我の形成や家庭における葛藤に満ちた人間関係の問題などを省くことはできない。人間発達援助の実際ではかならずや前面に表れてくる問題である。

自分ということが一貫していること，すなわち，自己の斉一性（sameness）と連続性（continuity）の自覚と他者がそれを認めてくれることの自覚をアイデンティティ（Ego Identity：自我同一性）の獲得・形成という。この概念を使用して人生課題に着目したのはドイツ生まれのエリクソン（Erikson, E.H.1902－1994）という精神分析の心理学者であった。彼自身，若き日に流浪の旅をしたという複雑な生い立ちを持つユダヤ系の「父のいない人」であった。大学には行かずに，ウィーンのS.フロイトの娘，A・フロイトのもとで精神分析的心理治療の指導を受け実践の力量を高めたが，第2次世界大戦時のナチスの暴力に絡んで欧州からアメリカへ移住しなければならなかった。エリクソンの心理学的概念は専門的にも深い探求を必要とするが，第一には，時代が変わって価値観が転換するという歴史的変容の理解が大事であろう。主著の「自我の発達と歴史的変化」（Erikson, 1946）によって内村の生涯を考察してみた場合はどうであろうか[21]。まずは，次のことばを紹介しておくのがよいだろう。

> 歴史学者たちは，単純な事実を無視し続けている。あらゆる人間は母親から生まれること，誰もがかつては子どもであったこと，あらゆる国のあらゆる人々は子ども部屋から人生をはじめること，社会は子どもから親に発達するプロセスの途上にある人々に

よって成り立っていること，そうした事実に目をむけていない。

（エリクソン，1946/2011，西平・中島訳　p.001）

成長しつつある子どもが，生き生きした現実感を獲得するのは，次の二つの自覚を持つ場合である。一つは，経験を積み重ねていく独自の生き方（自我統合）が，自らの属する集団アイデンティティの中で，成功した一事例として認められているという自覚，もう一つは，そうした自分独自の生き方が，集団アイデンティティの求める時間＝空間やライフプランと一致しているという自覚である。

（エリクソン，1946/2011，西平・中島訳　p.006）

新しい資料を交えてアイデンティティの形成という観点から紐解くと，内村ほど自我の確立に苦闘した人物はまれであることがさまざまに浮かびあがってくる。すでに，土居（1982），生越（1996）のようなすぐれた考察があるので，それらを参照しつつ，内村が札幌農学校入学以前とアメリカ留学後も含めた人間成長過程にふれてみようと思う。つまりは，「私はどのようにしてクリスチャンとなったか」（土居健郎訳）」なる日記を，むしろ，人間成長過程における他者との関係性や揺れ動く自己の感情・情動の不安定さという面からから読み直すことになる。

第一に，内村が江戸から明治へという維新の歴史的変容期に生きた人だったということの把握が必要である。土居も生越もエリクソンのアイデンティティ形成の心理学を参照しているが，アイデンティティ形成の根幹は安定した自尊感情が育っていくことにあり，幼少期に安全と安心の養育を受けて，他者とのあいだに愛着を形成することが基本になる[(22)]。また，社会組織のつながりの中に生きて「生きていく意味」を感じ人生展望をもつ経験が不可欠である。内村は，幼少期からさまざまな事象に興味を示し神仏への関心も人一倍高く過敏な子どもであった。ところが，高崎藩士内村宣之の長男として7歳で明治維新を迎えた。武士階級は存在の経済的基盤を喪失し，「忠誠心」という精神的支柱をも失った。内村家の資料はそれを伝える。父の役職都合により，東京，高崎，それから東北は石巻，気仙沼，そしてまた高崎，東京へと空間的移動（引越）も重ねている。幼友達ほかいろいろ失ったことであろう。札幌農学校に入学した16歳のときに，まだ45歳の父宣之から家督を譲られた。一家の面倒をみなければならなくなったわけである。このような幼少年期の体験は人間形成を考察する臨床心理学からは特別に注目される。鑑三が背負い込んだもののなんと大きなことか。

鈴木（2012）は，資料を読み込んで「序章　維新変革と二生」を起こし，「父と子」，「『父』の喪失」を論じている[(23)]。「まぶしく映じていた父の姿は，高崎県少参事の免官によって，事実上失われていた」と論じている。失業者となった父の姿である。

第二の点はさらに大きな影響を及ぼした。内村は，家庭においては厳格で学問を愛した父のもとでほどよく成長したかに見えるが，実は，母ヤソの愛が弟（達三郎）に注がれていたという生育史上の大きな問題をかかえていたのである。これは重ねて特別に注目されることである。この点については身内による記録がある。戦後の精神医学研究の権威者となった，鑑三の長男内村祐之の『鑑三・野球・精神医学』に掲載されている妻美代子の「家庭人としての父鑑三」である[(24)]。ここには「幼時からの貧困，生母の愛の不足」や「しかも生みの母に疎まれ，弟妹に背かれたのだから，父の苦衷は察するにあまりがある」とある。さらに，1904（明

治37）年，鑑三が44歳のとき，生母ヤソは65歳で精神障害により入院し亡くなっている。ヤソの死にあって，弟達三郎らとの兄弟間確執がいよいよあらわになった。以下の一文（宮部金吾への手紙）が残されている[25]。かなりの苦悶といってよい。筆者が総合病院精神科に勤務していた時代にも，こうした家族の心理的葛藤はむしろ日常的でしばしば「家族介入」の必要を体験したが，内村にとってはまさに骨肉の争いであって相当の苦しみだったに相違ない。手紙には「私は，あまり愛されたという思い出がない母をひとりで看護した」などと，臨床心理学的な基本の問題（Basic mistrust：Erikson.E.H.）がなまなましく訴えられている。

> 小生は今度は又々奇態な経験を有ちました。余りに愛せられざりし母を小生一人で看護し，終いに一人で，植木屋と車夫の助を以て，一昨日雑司ヶ谷の墓地に葬りました，達三郎今度母を死に至らしめしは重に小生の罪であると言ひ張りて，病中も死後も一銭の寄附をもなさず，一指の力も貸さず，アマツサへ葬式の場にて小生が感慨を述べる時に小生に妨害と侮辱とを加えました。（中略）然も弟妹四人東京に居ったのであります。
>
> （『全集』，第37巻，p.36）

内村祐之が東京帝国大学医学部精神病学教授であったときにそこで学び，後に，アメリカで精神分析学を学んだ精神科医土居健郎の「内村鑑三における人間形成とキリスト教」がある。この論文（元は英文）は重厚で，内村が甘えの感情に特に敏感であったことなど精神病理をはずさずに論じている。土居の見立ての白眉は「激しい幻滅感」の変遷という考察にある。「札幌から東京に逐いやった激しい幻滅感」は「何に幻滅したのだろう」と問う。そこから，土居は，最初の妻たけと離縁したころはすでに「抑うつ状態」であったと診ている。内心の幻滅感とは「私が欲するのはこんなものではないという感じを抱いたのであろう」とも推測する。内村の生涯にはずっとこの幻滅感と罪悪感がつきまとうというのである。従前，これらを「宗教と信仰」という面から論ずることが多かったのだが土居の見方は異なった。

内村の生涯とは，こうした，まさにエリクソンが「自我の病理学と歴史的変化」と呼んであきらかにしようとした危機的状態が繰り返された生涯といって過言ではなかろう。エリクソンは「健康なパーソナリティ（Healthy Personality）と危機（Crisis）」なる概念を提起したが，内村は基本的に生涯にわたって危機（Crisis）をまぬがれなかったかに思える。

土居の独自的な論考の末尾に「以上の要約」があるので引用する[26]。

> 鑑三は逃亡者のごとく抑鬱の状態で日本を去ったが，おそらく日本に帰った時もそれにまさるとも劣らぬほどに悪い精神状態にあった。もっとも彼はその間キリストの信仰の中で新たな統合を経験し，また何人か一生の友人を見出した。なかでもシーリィが最たるものだが，それは彼が文字通り鑑三の精神的父となったからである。これは彼にとって願ってもないことであった。というのは上述したごとく彼が実の父に指導と保護を仰ぐことはできなかったからである。彼は精神的に父がないも同然だったのに，新たに父が与えられたのである。ただし，この一事とそれに類することを除けば，彼の米国滞在はとても快適とは言えなかった。（中略）私は次の事実に読者の注意を促したい。それは鑑三が約5年間の間，最初に札幌から東京に彼を逐いやった幻滅感をはじめとして，次から次と幻滅を味わった不思議な事実のことである。鑑三は後半生においても多くの幻

滅を経験せねばならなかった。誇張していえば，彼はあたかも幻滅を経験するために生まれて来たかのごとくである。

（土居，1982．p.115）

ところが，いうなれば「通奏低音」のごとくに，内村にはある行動変容が起きていたことにも目を向けたい。晩年のことではあるけれども，たとえば，長男祐之の妻美代子の先の一文に描かれているように，65歳の内村に孫の正子が誕生すると，愛想のよい「お祖父ちゃん」になるようなことがあった。

2.2　教育思想形成の萌芽

先述の生越は臨床心理学者で，「内村鑑三―苦悩と回心の軌跡」なる論考は土居と同様にエリクソンなどを参照しながら内村の「人格の内側」から接近しようとした労作である。内村鑑三という人間を理解するには臨床心理学からのアプローチがかかせないと思われるが，ペンシルヴァニア知障碍児養育院での看護人体験を「ある覚醒へ」と題して分析している。これは，生越が名古屋学院大学勤務時代に「近代思想研究会」で共同研究を行っていた人々とともに『「内村鑑三」と出会って』を上梓した際に寄稿された。名古屋学院大学の前身は内村とのゆかりがある名古屋英和学校である。この学校は，アメリカ宣教師クラインによって設立された。「不敬」事件後の「国賊」扱いの中で，1896（明治29）年9月に36歳の内村を月給70円をもって手厚く招聘したという。実は，このときの名古屋英和学校就職に関連して注目したいことがある。それは，人間教育と福祉にかかわろうとする内村の思想と行動に関することである。

鈴木（2012）の「内村鑑三年譜」を検討すると，京都から名古屋英和学校に移動する前，同年5月19日に，「石井十次の岡山孤児院を尋ねる」とある。少し経って，1899（明治32）年には，『東京独立雑誌』29号に「米国ペンシルバニア州白痴院第45年報『書評』」を寄稿している。そこでは，米国のかの州においては同規模の白痴院がもう一か所設置されているほか，州立瘋癲病院が7か所設置されていることを評価したあと，「然れども堂々たる大帝国が一つの国立癲病院を有せず，共有する盲唖院なるものは微々として算ふるに足らざるものなるを見て，其振興の現象の何処に存するやを知らず」云々と日本国に檄を飛ばしているのである[(27)]。

1900（明治33）年8月には「午前，ペンシルヴァニア知的障碍児養育院カーリン院長につき講演，同日午後，巣鴨にある留岡幸助の家庭学校を参加者とともに訪問」とある。1911（明治44）年には，長崎での講演の帰路，またも岡山孤児院を訪れている。1921（大正10）年4月には，ペンシルヴァニア知障碍児養育院の旧友で医師のM.W.バーが来日したので横浜に迎えている。

先述のように，筆者の若き日には，この年譜で見れば「足尾銅山鉱毒事件」，「不敬罪」，「非戦論のため，幸徳伝次郎，堺利彦とともに朝報社を退社」などの彼の社会的行動と「白痴教育に身を投じた最初の日本人」たる内村鑑三に惹かれていたことになるのだが，そういう内村鑑三だけではなくて「教育・福祉」に関心を示していた内村鑑三がいたということである。これは，あきらかに，1885（明治18）年に訪れたペンシルヴァニア知的障碍児養育院での看護人体験に源を発する行動と考えられよう。ここに至って，筆者は，彼の人間発達援助思想の形成を探りたい。

3　エルウィンでの看護人体験

3.1　アメリカ留学

初婚の妻たけと別居して，内村は24歳（1884年）で突然アメリカに発つ。後に，内村は1894（明治27）年の『流竄録』（るざんろく）でこう記す[28]。

> 去る明治17年の秋，余は奇異なる目的をもって米国におもむけり。そは他なし，余は不幸にして早くよりキリスト教を信じ，実行的慈善事業にあらわるるキリスト教の結果をその本国において見んことを欲したりしなり。
>
> （「流竄録」，『全集』第3巻，p.52.）

しかし，現実には行く当てがなかった。辿り着いたのが，エルウィン（Elwyn）のペンシルヴェニア州立知的障碍児養育院（The Pennsylvania Training School for Feeble-Minded Children），いわゆるエルウィン校である。ここは医師もいる生活施設を併設しており看護人（attendant）としての労働に従事することになった。現在の日本なら生活指導員と称するかもしれない。この時の看護人・生活指導員としておさまるまでのいきさつと入ってからの経験については『余はいかにしてキリスト信徒になりしか』の第7章「キリスト教国にて―慈善家の間にて」に記述がある（以下，英語表記は原文からの筆者による挿入）[29]。

> アメリカに着いて間もなく，私はあるペンシルヴェニアの医師に「拾われ」た。この人はどこまでも実際家肌の慈善事業家で，私の性質をよく調べた上でひきうけてくれ，慈善事業の実際を一番低い仕事からはじめて一とわたり経験できるようにという配慮から，私を「看護人（attendant）」の一員に加えた。帝国官吏から精神薄弱者の施設（Asylum for Idiots）の看護人へ，それは私にとっては全く急激な変化だった。しかし私はそれをそのようには思わなかった。ナザレの大工の子によって今や全く新しい人生観を教えられていたからである。
>
> ここで一言しなければならないのは，私の養護院勤め（hospital service）は，マルチン・ルターのエルフルトの修道院入りとほぼ同じ目的からだった，ということである。私がこのような道を択んだのは，私がこの方面で奉仕することが，この世にとって必要だと考えたからではない。ましてやそれを（私は貧しかったが）職業として求めたのではない。私は養護院だけが「来るべき神の怒り」をまぬかれることのできる避難所だと思い，そこで自分の肉（flesh）を従わせ，自分を鞭打って心汚れなき境地に達し，ついには天国（kingdom of heaven）を嗣ごうと願ったのだった。
>
> それゆえ，私は根本においては利己的だったのであり，幾多の苦しい体験を通じて，利己主義はどんな形をとろうとも悪魔のものであり罪であることを学ばねばならなかった。慈善が求めるところ，全うき自己犠牲と余すところなき自己没却，にいたろうと努力すればするほど，私の生来の利己心はありとあらゆる恐ろしい罪悪の姿をとって立ち現れた。わが中に見出した暗黒に圧倒されて，私は意気消沈し，言いようのない苦悩に悶えた。
>
> （松沢訳，1984. Pp.158-159.）

1894（明治27）年の『流竄録』にはより詳しく記されている。過去の体験を6年後に回顧したものであるから何らかの意図があることを酌む必要があるだろうが，これに近い経験がある筆者にはいろいろ感銘を抱かずにはおれないところがある。

まず，このエルウィン看護人体験で内村はいかなる知見，つまりは発達援助思想を得たかを考えてみたい。ペンシルヴェニア州立知的障碍児養育院に一看護人として雇われることになったくだりである[30]。

白痴の教育

余のフィラデルフィアに至りしや，慈善事業を目的とする余の嚢中わずかに4週日の糧を余すのみ。宗教の名をもっては食物を求めざるべしとの余の決心は，余をして4週日後の食を得るの道を知らしめざりき。いわんや余の目的とする視察事業においてをや。青年のなすところ，おおむねかくのごとくならざるはなし。その目的の高尚勇壮なる。その思慮の浅薄なる，余は家郷三千里を去って後に初めて余の無謀に驚きりき。（中略）

朝食後，余は友人と共に対谷の大厦を訪へり，是なん即ちペンシルヴェニア洲の洲立にかかる，白痴院にして其院長ドクトル，カーリン氏なるものこそ神経病学専門家として，病院組織の先導者として米国刀圭社会に錚々の名ありし人なりけれ。

（『流竄録』1894，Pp.52-53.）

“HOW I BECAME A CHRISTIAN: OUT OF MY DIARY”も『流竄録』も，帰国後およそ6～7年後に日記を読み返しながら回顧しつつ書かれた論考であるからいささか距離を置いて客観化された記述ではある。実際は「若気の至り」のような渡米であった面が否めないことを押さえておく必要があるだろう。土居健郎は「幻滅」の体験と見た。見聞するところは大きかったに違いないのだが，内村の生涯を通して経験されるところのいわば挫折に近かったはずである。そういう負の側面からの評価をもってこれらの記録は読まれてきたかもしれない。

ところが，である。筆者は，人間発達援助思想の形成を論じるにあたっては，ここに酌むべきところがふんだんにあることに留意したいのである。今日，大学で社会福祉学や教育学を学んでその方面に進路を見出す若いひとは少なくないが，そういう人々にはこのときの，すなわち留学期間の体験と帰国後に回顧的な思索を行った内村鑑三に学ぶべきことがあることを伝えたい。

その第一は，先に引用した鈴木（2012）のいう第二の特性が発揮されていることである[31]。

鈴木は，「札幌農学校で学び，自然科学者として習得した『実験』的生き方である。人生において遭遇する数々の失敗を『実験』として克服し，それを糧として新しい人生を切り開いていく。このとき，失敗した経験が重層的に積み重なるところが，内村の大きな特徴である」と指摘していた。確かに，『流竄録』は，水産学者になっていたら世界的権威になったであろうと言われる内村の，自然科学者としての才能があふれた障害児者たちの行動観察記録なのだった。農学校卒後，札幌県御用係として「北海道鱈漁業の景況」や「石狩川鮭魚減少ノ源因」のような論文を多数残しているが，それに似た趣がある[32]。対象をしっかりと観察して問題の本質を考証していく科学者のまなざしがある。とはいえ，24歳の他の農学校出身者に，これほどの「人間観察記録」はそう簡単には書けまい。やはり，内村の独創性の発揮といえ

ようか。すなわち，すぐれた対象把握力，観察力をもって知的障害児者の支援を論じて見事である。

『流窟録』は，帰国後6年を経過して雑誌『国民之友』に連載されたものであるから，国民としての一般読者に向けて書かれた論文であろう。しかし，すでに，2年前の1892（明治25）年3月の『基督教新聞』（452号）には「白痴の教育―故ジェームス，ビー，リッチャーズ述」を寄稿しているのである。なんと，内村は，ペンシルヴェニア州立知的障碍児養育院の看護人として雇われた1885（明治18）年6月に，院長カーリンに従いワシントンで「慈善矯正全国会議第12回年会に出席して演説している。その時，「彼国有名の白痴教育者」James B，Richardsによる「満場の感覚を惹起せしものなり」と感じた講演を直に聴き，それを筆記したと思われるメモを邦訳しているということになる。12の事例をあげての講演であったが，内村は以下の下線箇所に傍点を打って強調している。ここでの「余」はJames B，Richardsである。後日，内村が聖書研究と伝道のかたわら，重い知的障害児の教育的指導に関心を寄せることに影響したことを伺わせる。このJames B，Richardsの指導方法は，いかにも内村を喚起させるかのようである[33]。

> 此如く若し諸君が教育するに於いても是等の小さき者の全身全力を尽くして為したることを忘れる可らざるなり，諸君は之を貴き善きものとして受けざる可らず，然らば彼等は之より他の事もなすに到らむ，若し諸君にして彼等の全力を尽くしてなせし事を受けずんば彼等は失望せん，諸君は彼等を失望せしむ可らず，又諸君自ら失望す可らず
>
> 今ここに余をして結論に於いいはしめよ，若しそれ一度これを試みて成功せずんば之を再び試みよ，尚ほならずんば百度試みよ，尚ほ成らずんば二百三百度五百度試みよ，寛大なれよ，而して千一度試みよ，
>
> （「白痴の教育」，1892.『全集』第1巻，Pp.282-283.）

このように，多少は資料を調べて参照してみたようなこともあるだろうけれども，白眉は以下に掲げる結論の部分で，かつ社会に向けた提唱である。今もってまことに驚異的の一言に尽きる。二点述べている。紙幅が乏しいので核心箇所をのみ引用する[34]。（引用者注：ここでも一部に今日では使用しない表現があるが歴史的文書であることをふまえる）。

> 余は出入り4年間を白痴院に消費せり。しかして得がたき利益は余に与えられたり。
>
> 一　白痴教育は余に教育の原理を伝えたり。その精神，方法は，これら下劣の学生の薫陶によりて余に指明せられたり。すなわち教育の精神とは，真実と忍耐と勉励をもって，体中に秘蔵せられおる心霊を開発するにあり。教育の目的，必ずしも学生に衣食の道を授くるにあらず。劣を優となし，欠を完に進め，愚に注入するに知の幾分をもってすれば足れり。黒と青とを弁じ得るざる者をして，ついにこれを識明得るに至らしめたる教育上の功績は，普通学生に抛物形（ほうぶつけい）と双曲線形の別を知らしむにまさりて大なり。有名なある教育者ジェームズ・ビー・リチャード氏は，満1カ年を消費して一白痴に「ネール」（釘）なる一語を伝えたりと。しかしてこの事に対する教師の歓喜，父兄の満足，教育社会の称賛はいかに大なりしよ。教育の目的は進歩にあり。されども進歩の度合いは学生各自の特性によりて異なるなり。この単純なる理を解せざるがゆえ

に，世に穎才（えいさい）と称する者を吹脹（すいちょう）して誇大ならしめ，愚鈍なる者を圧抑して失望せしむ。いにしえより識者が避難してやまざる賞誉の害は全くここに存する知らざるべからず。優勝劣敗主義をもって，学生の進歩を促すの最大勢力となすがごとき教育者は，いまだ教育の大任いずこに存するかを知らざる者なり。

教育の秘訣は至誠にあるとは，何ぴともよく唱うるところなり。すなわち法令によるにあらず，学則によるにあらず，権威によるにあらずして，これに従事する者の赤誠至実にあるなり。ああこの言，演説に吐露せられ，論文に筆せられ，教育を耳にし口にする者はこれを唱道せざるなし。しかるに19世紀今日の教育は至誠に最大価値を置くものなるか。もししかりとすれば，なんぞ教育に関する法令の煩わしきや。今日の教育は機械的にして法則的にして模式的ならざるなりきか。教育の秘訣は至誠なりとの大義は，余は米国白痴院に入りて初めて学びしなり，その前これを知らざりき。

（中略）未来の文部省はよろしく白痴院を設立し，これを堪うるをもって教員の一大資格となすべし。基事業の革新この時をもって萌（はじ）まらん。

二　白痴教育は社会学上の大問題を解析しつつあり。罪悪問題なり。監獄問題なり。政治的に，哲学的に，宗教的に，これらの難問に最後の判決を下すものは白痴教育ならざるべからず。人の罪行は必ずしも彼の意志の結果なるやとは，近世の犯罪学者（クリミノロジスト）が疑ってやまざるところなり。彼らの極端なるものはすでに罪感を病疾の中に組み入れたり。余はすでにハリー某の白痴なるゆえんを述べたり。すなわち彼の生来の性は物を盗み働く時は社会は彼を罪悪人として取り扱うべきや。堕胎せんと頻してついに成功せずして生まれし児は，成長するに及びて殺人罪を犯す者多しと彼の罪は彼自身に帰すべきか。（中略）

ゆえに白痴教育は吾人に宥恕と寛容とを教えうるものなり。（以下略）

三　山上に一村落を創り，700の無辜なの白痴と100の慈善家が，一家団欒の和睦の内に共に一生を送りつつあるの景況を見よ。

（『流竄録』，1894.『全集』第3巻，Pp.65-68.）

続けて院長ドクトル・カーリンの評価が続く。あえて引用しておくべきは「ゆえに院長の遠望は，白痴植民をして全く自給独立なしむるにありき，彼はこの点に関しては非常の確信をいだけり」と述べる箇所である。1894（明治27）年のこの時期に，このような評価が可能であったこと自体が驚異である。しかも，『流竄録』での内村は，自身の観察からデータを記録して障害をもつ子どもたちの言動を読み解き，今日にいう社会福祉，特別支援教育の本質的な教育思想を考察しているのであって聖書・古典の一句を引いてよしとしていない。強いてあげるならば，カーリン院長が「余の愛する者よ，この一言を記憶せよ，余の信ずるところによれば，神は一人も無益なる人間を造りたまわざるなり」と自分に語ったことを記しているだけである。この点において，日記の記録に基づく『余はいかにしてキリスト信徒になりしか』第7章での養育院看護人体験の記述が，『旧約聖書』の「ヨブ記」や「エリミヤ書」を読みながら思索したキリスト教思想の探求に多くをあてられていることと異なっている。看護人体験当時の内村は，聖書を読むことに気持ちがいっており，実際の看護人体験は苦労と違和感を抱く日々だった。そうであったかも知れないが，しかし，帰国後6年を経て，その看護人体験の意味づけが客観的になってきた。人間発達援助思想の深まりをみた。筆者にはそのよ

うに読める。

次いで,内村の発見として重要なことが記述されていることに注目しよう。『流竄録』と『余はいかにしてキリスト信徒になりしか』の第7章で,院長夫人（Mrs. Superintendent),婦長（Matron）など女性職員の働きに注目している箇所が目を引く。先述の奥田三郎も,昭和初期に城戸幡太郎らと立ち上げた児童福祉施設小金井学園で共に働いた松沢病院看護長の石橋ハヤや井口チドリの類まれなる役割をいち早く指摘していたが[35],それに先立つ,この内村の一文は障害者福祉分野におけるジェンダー的視点からの嚆矢となったかに思える。

> 院長に次いで勢力のあるものを院母なりとす。彼女は女子部の総理にして,全院の権内に宏大なる洗濯室あり。衣類,靴,帽はことごとく彼女の検閲を経ざるべからず。彼女に逆らうは危険なり。院長彼自身も時には彼女の譴責（けんせき）を蒙ることあればなり。
>
> （『流竄録』,1894.『全集』第3巻,p.56.）

> 婦長も,この養護院で感銘をうけた人の一人だった。こんなにしっかりした人を私は知らない。しかもこの人は女なのだ！婦長は,この少年あの少女に注意深く眼を配りながら,宏大な建物の隅々まで見廻った。こんな時,ジョニーの靴下をジョージーにはかせ,サラの帽子をスージーにかぶせるような不注意な看護人がいようものなら災難だった。このすぐれた女性の実例によって,男だけでなく女も人の上に立つことができるのだということが明白になった。この婦長はやはりキリスト教国アメリカが生んだ人だ。
>
> （『余はいかにしてキリスト信徒になりしか』松沢訳,p.162,）

3.2　看護人体験

1885（明治18）年1月1日からの,内村にとっての「看護人体験」を今日の時点で紐解いてみたい。筆者はこれまで「看護人体験」としてきたが,これは内村本人が使用したことばではない。そこで,具体的な議論に入る前に,思想家森有正がパリで生活して幾度も論じることになった「体験」と「経験」の差異の議論を引いて考察することから始めたい[36]。英語,フランス語ではともにexperience,expérienceなのだが,森がかなりのこだわりを見せたことばである。

> 「経験」は「体験」とはちがう。これは本来,私の持論であり,また確信である。しかし始めからそうであったわけではない。ラディカルなカルヴィニズムの神学の影響の強い環境の中で育てられた青少年期の私の精神は,「体験」に対する徹底的な懐疑,というよりもむしろ猜疑心を植え付けられた。その際に,私は「経験」と「体験」とを区別することを勿論知らず,経験を体験と一緒に同じ括弧の中に入れてしまったように思われるのである。
>
> 私の一家は明治の代表的キリスト教指導者植村昌久先生の深い影響下にあったが,中学生時代の私は,父と親しかった高倉徳太郎先生の福音的キリスト教の強烈な作用をうけ,英独の神学者,カール・バルト,E.ブルンナー,P.T.フォアサイスなどの著書,またオランダのアブラハム・カイペルの「カルヴィニズム」などは何度も読んだことを記憶

している。遥か後になって，私は思想に対する「経験」の本質的重要性を理解するに至ったが，その際「体験」はそれとは区別されて，決定的に否認されるようになる。そして，経験をめぐるこの経緯の源泉は私の中学時代までも遡るのである。（中略）。

経験は一つの生涯を，更に自己そのものを定義する，とは私が何度も繰り返し言ったところであるが，その一つの生涯を，あるいはその一箇の自己というものが，どれほどの生々しい凄惨な現実をそのうちに蔵していることであろう。それを徹底的に味わい尽くし，感じ尽くさなければ，一応形式的に確立された経験も形骸に過ぎぬものとなり，人生は酔生夢死に等しくなってしまうであろう。

（森，1972．p.052，p.067.）

この森の一文には病気を患って札幌医科大学病院に入院し，木々が光を浴びていた札幌近郊の散策が語られている。「その間一度北大文学部で講演したが，それを機会にまた経験に就いて考えてみた」とある。森もまた，内村同様に細かに日記をつけていた。方や英語で，方やフランス語で。

さて，そうすると，内村の若き日の「看護人体験」は，たまたま「体験」として与えられたことなのであって，後世の森有正が思索した「経験」足りえたのかどうかが問われることになる。内村はかなり克明な日記をつけていたので，1885（明治18）年1月日から，当時の記録を探ってみたい（注：英語表記は筆者の挿入）[37]。

1月1日

寒し。昨夜「信仰によりて義とされること」について感じるところ大。終夜勤務。始めての看護の仕事（caring a sick）にあたったのである。わがために道を開きたまいし神に感謝。（中略）

私はまるで聖徒になった（I felt I became a saint myself）ような気がした。

ここから施設での看護人としての労働と生活が始まった。しかし，彼の日記には『ヨブ記』を読む（1月6日）からはじまってキリスト教思想に関する理解の変遷と苦悶が綴られていく。そして，三か月後の4月6日になって「精神薄弱児の教育に一層情熱を感じるにいたった」（More zest and fervor in teaching the idiotic children）と書いている。知的障害児の教育家として名高いジェームズ・リチャードに会って教えられたことのようである。その教えとは，自分たちの仕事が，「『父なる神を教えること』（“showing the Father”）ができるということの実験談（pedagogic experience）だった。私は，電気に打たれたような衝撃を受け，その感銘は後々まで残った」と記している。つまりは，宗教思想と信仰からの「体験」理解なのだった[38]。

それ以来，慈善も教育も単なる人間的な同情や打算による事業ではなくなった。両者ともに，唯一の善なる神を示すという，高い宗教的目的を持つものと考えられるになった。施設の看護人という仕事はこのように栄化されて，神聖なつとめ神に対する義務となり，それまでこの仕事にまつわっていた卑しいことに身を貶すといった感じは一掃された。リチャーズ氏はユニテリアンであるが，私はこの人を私のために遣わされた宣教

師の最善の人だと考えている。その人がらと深い同情とは，人間関係や読書が正統派的なところから来た，私の三位一体論者としての偏見を大いに取り除いてくれたのである。

（松沢訳，第7章，p.169）

こうして，日々の看護人・教育指導実践者としての当事者内村は，今日の児童福祉ないし障害児者教育の平均的実践水準にそのまま繋がっていったわけではない。内村の人間発達援助思想がそこに到達するためには抱え込んでいた内面の苦悶を解決する必要があった。そして，それは，思いのほか重要な職業課題であると同時に人間として生きる根本的課題，S．フロイトのいう「愛することと働くこと」（Lieben und arbeiten）であることに気づかせてくれる。あらゆる人間発達援助者の「自己の形成」（La formation du moi）の課題ともいえる根本的な問といえるだろう。宗教的平穏が得られれば慈善の実践に貢献できるというほど安穏とした世界ではないのである。

ゆえに，『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』から二箇所だけ先に引用しておきたいことがある。これは内村鑑三の人間発達援助思想の形成を考察する際に省いてはならない重要な自己洞察の箇所になる[(39)]。

勤めのいたらなかったことと，親切な院長の世話になることにしながら早々と計画を変えたことを，心に深くわびて，私は病院（注：訓練校）とそこで得た多くの善い友人に別れた。私の心は重かった。慈善，つまり「人を愛する」ことは，「自分を愛する」傾向が根絶されないかぎりおのれのものにならぬことを私は悟ったのである。少なくとも私の場合，肉体の癒しに先立って魂が癒されねばならない。そして慈善だけでは魂を癒すに足りなかったのである。

（松沢訳，第7章，p.172）

君は内に向けていた注意を外に転ずる。つまり，自分を忘れ，何かほかの仕事をはじめる。キャベツの栽培でもよい。すると呼吸が楽になり，腕の筋肉も少しずつ太く堅くなってくる。日ましに故障がなくなってゆくのがわかる。そしてついには前にもまして丈夫になる。君は反射効果で癒（なお）ったのだ。君はキャベツにおのれを注ぎ出し，キャベツは君を癒したのだ。

（松沢訳，第10章，p.118）

なにゆえ，35歳の内村がこのような文章を残したのであろうか。東京帝国大学医学部精神病学教授だった長男の祐之が指摘していたように「過敏症」や「強迫症」あるいは「超自我型性格」などの精神疾患水準の苦しみを抱えていた内村鑑三にとって，ペンシルヴェニア州立知障碍児養育院で得たものは小さくなかった。ただ，その結果が，上記の回顧であったということもできる。広く，教育実践では自らの実践を「自分」から離して見るという「自己客観化」と「自己理解」とが必要である。今日，わが国の≪日本臨床教育学会≫などでは，研究の基本的な柱として「人間発達援助者自身の自己理解」を自己の資質向上として掲げている。

すなわち，内村の場合も単に障害者施設で苦労したから立派な人間ができたというようなことではまったくなかったことに注目したい。土居も生越も指摘しているように，本当の人

間発達援助思想が身に付くためには，次の段階を待たなければならなかった。それは，知られるように，クラークの母校アマースト大学J.H.シーリー総長との出会いであった。シーリーという，自分に対面し，自分の話を聴き取って対話してくれた人間との出会いのことである[(40)]。このときの，劇的で感動的な出会いは幾多の紹介がある。内村の場合は「神」との関係が問題のひとつであったけれども，現代のわれわれには多様な「自己客観化」の機会があり，少なからず人々に用意されていることを筆者はむしろ強調しておきたい。

> 私は，故国で洗礼を受けてからはほとんど10年の後に，この地において真の意味で回心した，すなわち向きを回らされたと思っている。
>
> 主はこの地で，私に御自身を現したもうた。特にあの一人の人―鷲のような眼と獅子のような面と，子羊のような心の総長を通じて。うちなる聖霊，前なる数多の模範，周囲の大自然と物事は，ついに私を征服した。
>
> （松沢訳，第8章，p.190.）

4　内村鑑三の人間発達援助思想

4.1　援助実践

それでは，内村のペンシルヴェニア州立知的障碍児養育院での実際にふれてみよう[(41)]。

> 余はまず看護人として本院に雇い入れられたり。余の職務は白痴22名を預かり，これに衣食寝浴（びよく）の世話を与うるにありき。しかして余が白痴教育の原理に達せんがために，院長は余をしてドイツ婦人某の助手たらしめ，彼女と共に最下級生（すなわち単数4個以上を数えざる者）40余名を分配して教授なさしめたり，余は明治18年1月1日より此聖職に就けり，而して爾来3ヵ月間は余の未だ曾て味わざる生涯の苦戦なり。
>
> （「流竄録」，『全集』第3巻，p.60.）

こうした記述が延々と続くのだが，キリスト教信仰でも慈善実践でもわがこころは満たされないでいたと，そう言っている内村だった。

ただ，今日的に見て驚くべきことがある。先述のように，内村の施設での障害児者の観察記録はまことに詳細，かつ正確で，かのＪ.イタール（1801/1978）の『アヴェロンの野生児』の記録に引けを取らない。短いながらも，この障害児者の言動観察記録を読めば尋常ではないことがわかる。ただし，それも以下の考察がことさらに重要であると思われる。

というのは，『流竄録』の発行は帰国後6年経った1894（明治27）年である。それは，前年の1883年に刊行した『求安録』においてかなり深められた自己観察，自己内省をふくめた省察（reflection）がなされた後のことになる。このとき，内村は「看護人となりて余は初めて，短気の無益にして有害なるを悟れり。余は温良の，至大なる勢力を有することを学べり」というほどになっていた。シーリー総長との出会いによる人間的変容はむろん重要であったが，それだけではない大きな内的変化がここに述べられている。実際，『求安録』を刊行したときの内村は，すでに自分の身の振りを考えて伝道師になることに決めていた[(42)]。

> 平安を慈善事業において得るあたわずして，余はついに極端手段を取らざるに至れり。余は事ついにここに至らんことを恐るるや久しかりき。されども今は唯一の道，余の方向として存するのみ。すなわち身を伝導界に投じて神の祝福を求めんとするにありき。
>
> （松沢，1984. 収録.『求安録』,「脱罪術」, p.252）

思想家の森がいうような意味において「看護人体験」から看護人「経験」に変化するには，こうした徹底的な自己探求の作業が必要であった。そのように見れば,『流竄録』は位置付けが異なってくるというものであろう。『流竄録』は，幼少期よりの特質に加えて父の漢学から修得した教養，それに札幌農学校で培った自然を観察し記録する能力，そういうものが備わった書物である。そのうえ，人が人間の関係の中で苦しみながら生きることを幼少時から体験してきたもの看護人「経験」が合わさった格別の書である。筆者にはそう映る。

この『流竄録』をめぐって，先述の精神科医上野（2012）は,「内村鑑三のエルウィン知的障害児学校における『看護人』体験の今日的意義」を論じている。エルウィン校での事例「ダニーをめぐる一件」が重要である。「内村はある日曜日の当直で扱いの難しい30余名を担当したが，その中で全く指示を聞かないダニーがいて，終日，混乱状態であった。近くの森に連れて行き，杖で罰してやろうと考えたものの，その日は安息日であるため，自分がその日の混乱の責任を引き受けようと考え直して，夕食を断つこととし，その旨を全員に告げた。翌朝，このことが院内で評判となり（中略)･･･他の者も会議を開き，自分たちの組からダニーを追放することに決定し，それを聴いた院長は了解し，ダニーを下級に落とし，1回の断食を命じた」のだった。上野は，もうひとりのキリスト者で児童福祉家（滝之川学園）の石井亮一の場合の「断食」と照らして「内村の『断食』についての考察」を表している。「筆者は内村のエルウィン校での記録のなかで，入所児の自治の場面に関する具体的な記述が最も重要であると考えている」と指摘する。そう，内村は見るところが違うのだった。セガン流の教育技術ではなくて障害を有する人々の「自治」活動の実際だった。

さらに，批評家の若松（2018）は，施設で「ジャップ」呼ばわりされながらも，内村の「教育の精神とは，真実と忍耐と勉励をもって体中に秘蔵せられ居る心霊を開発するにあり，教育の目的必ずしも学生に衣食の道を授くるにあらず」を引いている。そして,「教育の根本は霊性の開発にあって，職能を身につけさせることにあるのではない，というのである。この経験はそのまま後年の無教会運動に流れ込んでいる」と述べている[(43)]。三度目の引用になるが，鈴木（2012）は,「札幌農学校で学び，自然科学者として習得した『実験』的生き方である。人生において遭遇する数々の失敗を『実験』として克服し，それを糧として新しい人生を切り開いていく。このとき，失敗した経験が重層的に積み重なるところが，内村の大きな特徴である」と指摘していたことが，すでに『流竄録』に詰まっている。

内村鑑三のエルウィンにおける「看護人体験」はこうして重要な看護人「経験」に変わっていくことになる。「白痴の教育」の後半部は，先述のように詳しい「障害者援助論」であり，内村が三点指摘して縷々述べていることは先に紹介した。この『流竄録』たるや，後の社会福祉における障害者支援の根本思想を論じたものだったといってよいのではないかと考える。

4.2　教育思想の形成

さて，次の内村の一句はいったい何を表すのであろうか。キリスト教思想家・伝道者とし

て生きていこうとしたはずの33歳の内村が選んだ句なのかと思う人も多かろう。明治26年刊行『求安録』の冒頭,「自序に代う」にこう掲げている。

口あいて腸見せる柘榴かな（芭蕉翁）

いろいろな解釈があるようだが，盟友新渡戸稲造(1889)もとりあげた，この句らしい英語原文（“Only a pomegranate is he”—so runs a saying“who，when he gapes his mouth，displays the contents of his heart”）を参照すると「多くを語ってきかせるのはいかがなものか」との抑制を句に託したかに思える。反面，いささかの悟りの境地にも思える(44)。強迫と不安におののいているのではなく，自然にまかせるという自己。まるで「無防備に口をあけてはらわたを見せるざくろ」に深い共感をしめしていた内村がいたかにも思える。常に自己を規制してやまない超自我的な「余」，禁欲と激情に苦しむ「私」，そういう自分のこころの持ち主ではなく，子どもの頃から培ってきた一面自由な「われ」（おれ）のような自分にも気づいていたのかもしれない。ともかくも，内村30代はじめに深められてゆく自己観察，自己内省の表現にも思える謎のような一句である。

松沢（1984）も，この芭蕉の作とみなしている句の引用について一言している。「抽象的な思弁に反対して，自己の人生における『実験』や経験した『事実』から出発することを強調した内村は，キリスト教を紹介するにも『余自身が神に恵まれし実験』を述べ，『柘榴の如くに自己の赤心』（『余はいかにして信者を作りしか』）を吐露して語っている。『求安録』冒頭に引かれた芭蕉の句はこれに対応しているものといえよう」と述べている。続けて，「このような内村における『自己』は，孤独と挫折を経て生まれたものでありながら，孤独や挫折を感傷的に美化したり，その中にとじこもるような個とは異なっていた。内村において，個は，神は支配する『宇宙』さらに人類・国民という小宇宙を構成し，独自の役割を与えられた存在であって，本質的に他のすべてと連帯的なものと考えられていた」と論じている(45)。さらに，「自己の外にのびる成長こそが自己の内における成長を可能にするととらえられているように，個はたえず隣人に働きかけ，国民・人類に使えるべきものと考えられていた」と見ていた(46)。

さて，そうであれば，人間発達援助のしごと，彼の時代にいう慈善事業にもかかわることができたかもしれないのである。結局，内村は慈善事業ではなく伝道のしごとに入ることになったけれども，しかし，遥かなる人であった。内村には，38歳のときに書いたBuddhism and Christianityという英文論考があって，仏教のよき理解者であることが伝わる(47)。主著のなかに『代表的日本人』があり，もっとも熱く論じているのは日蓮であることは知られるところだが，実は，内村は娘ルツを亡くした後の55歳の1915（大正4）年ころから，法然，親鸞にも言及するようになっていた(48)。「余の好む花」などという小文（43歳）には自分が愛する花は菫（すみれ）だということが面々と綴られる。そういう内村もいた。

『内村鑑三全集』の最終巻（岩波書店，第40巻）に採集されている一篇のメモのような「達磨」があるのがまことに興味深い。

彼は人世を解脱せしならん
然れども神を知らざりし

彼は衆生を憐みしならん
然れども彼らを愛せざりき
余は彼の如くに大悟徹底する能わざるも
無知比まゝにイエスの弟子たらん　（日付不明）

「内村鑑三の人間発達援助思想」という発想自体はよほど慎重に整理されるのでなければ，結局のところキリスト教の博愛思想に源を求めることになりそうである。しかし，「まさに一人のサムライの子として，私にふさわしい精神は自尊と独立であり，滑稽な駆け引き，表裏のある不誠実は憎悪すべきものであります」と宣言していた内村鑑三である[(49)]。ことはそう単線的なのであろうかということが，後を追おうとした筆者の問にあった。直接の慈善事業からはおりた内村だが，幾重にも彼の思想が重なって，内村の人間発達援助思想は遥かに影響を及ぼして発展し，看護人「経験」からあふれだしたものが多くの人々を動かしていった。たとえば，わが国の障害児者の発達支援活動の歴史を遡ると，数ある中でも近江学園のキリスト者糸賀一雄の実践と福祉思想が思い浮かぶ。糸賀の『福祉の思想』は内村の思想とあい通じている[(50)]。

じつはこの姿は，精神薄弱児や重症心身障害児にだけ見られる特別なものではなく，すべての子どもに共通のものであったのである。どんな子どもでも，その発達の段階が充実させられなければならないことである。1歳は1歳として，2歳は2歳として，その発達段階はそれぞれの意味をもっているのであって，その時でなければ味わうことのできない独特の力がそのなかにこもっているのである。1歳は2歳でないからといって低い価値なのではない。それぞれの段階がもつ無限の可能性を信じ，それを豊かに充実させること以外におよそ人間の生き方というものがあるべきであろうか。

（糸賀一雄　1965/1982.「発達保障という考え方」. p.168.）

影響を受けた人の多くはキリスト者ではあったが，内村の底知れぬ深淵な東洋文化や世界的規模の広い教養の蘊蓄があってのことであったということを理解しておきたい。この小論で語れることは限られたけれども，内村鑑三という先達のuniversalなる世界観，人間観，教育観に基づく人間発達援助思想は今後も深められるべきであろうと思う。それは内村の「後世への最大遺物」の一つに違いない。

たびたび引用したが、「内村鑑三研究50年」という鈴木（2012）が，渾身の評伝『内村鑑三の人と思想』で「以前にもましてきびしさと深刻さとを増している現代の課題，特に平和，環境，宗教的寛容，教育などに関して，むしろ高まりつつある内村の意義を述べようとした」（あとがき）と記している。あらためて，われわれに迫るものがある[(51)]。

注

*『内村鑑三全集第1巻』（岩波書店, 1980-1984）は『全集』第1巻と表記する。

(1) 関根正雄「序にかえて」,関根正雄編著『内村鑑三』(Century Books 25, 清水書院, 1967年)。シリーズ「人と思想」には, 釈迦, イエスなど世界の36人の思想家・宗教家にまじって日本人としては親鸞, 福澤諭吉と並んで内村が選ばれている。青年期の筆者に直に影響を与えた書物だが, 旧約聖書学者の関根は,「武士道に接木されたキリスト教」として, 内村が, 勇気, 節操, 正直, 清廉, 親切, 忍耐を重んじたことを指摘。「キリスト教の日本化」とも述べている。

(2)「地の塩」は『新約聖書』マタイ福音書5章13節による。奥田は旭川市出身の精神科医師で, 東大文学部哲学科卒後, 松沢病院心理職を経て慈恵医科大学を卒業。キリスト者留岡幸助が創設した教護施設北海道家庭学校で一時期校医を務めた。奥田の論考（大泉溥編『奥田三郎の子ども研究と治療教育方法論』, 日本の子ども研究第8巻, クレス出版, 2009年）は幅広い子ども研究の一大集成で思索に満ちている。「地の塩」は,「心理学は生物科学の1つであると思っている」との言葉と同じく,「臨床心理学における“人”の問題」(『北海道大学教育学部紀要』13, Pp.3-41.1967年.）に示されている。

(3) 矢内原忠雄『内村鑑三とともに』(東京大学出版, 1962年, 新装版, 2011年)。東京大学教授の矢内原は戦後の日本において, 内村鑑三に関する発言を精力的に行った。

(4) 小原信『内村鑑三の生涯』(PHP研究所, 1992年), p.8.

(5) 鈴木範久『内村鑑三の人と思想』(岩波書店, 2012年)

(6) 鈴木範久『内村鑑三問答』(新教出版社, 2024年)

(7) 若松英輔『内村鑑三をよむ』(岩波書店, 岩波ブックレット, No.845. 2012年)

(8) 若松英輔『100分で名著：内村鑑三　代表的日本人』(NHK出版, 2016年)

(9) 若松英輔『内村鑑三：悲しみの使徒』(岩波書店, 2018年)

(10) 松沢弘陽責任編集『内村鑑三』(日本の名著38, 中央公論社, 1984年), 冒頭に73頁にわたる「近代日本と内村鑑三」がある。「余はいかにしてキリスト信徒になりしか」の松沢自身の新訳と,「求安録」,「地人論」, それに「小篇」として11本の論考が収録されている。

(11) 蝦名賢造『札幌農学校―日本近代精神の源流』(新評論, 1991年)

(12) 太田原高昭「内村鑑三と新渡戸稲造」,『高等教育ジャーナル―高等教育と生涯教育』10, 2002年, Pp.133-140. 新入学生を前にした講演で実に適切な案内。

(13) ミシェル・ラフェイ (Michelle La Fay)『なまら内村鑑三なわたし―二つの文化のはざまで』(柏艪社, 2011年)。本書題名の通りの展開。

(14) 上野武治「内村鑑三のエルウィン知的障害児学校における『看護人』体験の今日的意義」『北星論集』第49号, Pp.37-54.　2012年

(15) 藤田正一『日本のオールターナティブ―クラーク博士が種を蒔き, 北大の前身・札幌農学校で育まれた清き精神』(銀の鈴社, 2013年)。「内村鑑三」, Pp.163-168.

(16) 上掲（1）.「魂の戦い―農学校卒業から渡米, 帰国まで―」, Pp.31-53.　先進的な内容の関根の著作ながらasylum for idiotsを「白痴院」と訳した内村の訳語がそのまま使用されている。英語のidiotは今日使用しない。ほかにも, 内村の時代の不適切な表現があるが本稿では歴史的概念であることを承知している。

(17) 上掲（5）.「はじめに」, p.ix.

(18)“HOW I BECAME A CHRISTIAN: OUT OF MY DIARY”, 1895年.（『全集』第3巻, 1982年. Pp.3－157.）

(19) 土居健郎「内村鑑三における人間形成とキリスト教」,『現代のエスプリ177号　天才の精神病理』至文堂, 1982年, Pp96-124.

(20) 鈴木範久『内村鑑三問答』(新教出版社, 2024年)

(21) Erikson, E.H.(1946) Ego development and historical change―clinical note. The psychoanalytic study of the child.1: Pp.319-350.（エリクソン, E.H.「自我の発達と歴史的変化―臨床的な覚書」, 西平直・中島由里訳『アイデンティティとライフサイクル』所収, Pp.1-43.　2011年.

(22) 生越達美「内村鑑三―苦悩と回心の軌跡」, 堀孝彦・梶原寿編『「内村鑑三」と出会って』勁草書房, 1996年. Pp.1-20.
(23) 上掲（5),「序章　維新変革と二生」, 福澤諭吉の『文明之概略』「緒言」には「一身二生」がある。境を経てふたつの人生をいきるほどの謂。
(24) 内村美代子「家庭人としての父鑑三」, 内村祐之著『鑑三・野球・精神医学』（日本経済新聞社, 1973年）所収, Pp.199-228.
(25) 宮部金吾への手紙, 1904（明治37）年11月17日。翌18日には同趣旨の手紙を信州下高井郡の藤沢音吉にも送っている。(『全集』第37巻, Pp.36－37.)
(26) 上掲（19）
(27) 内村鑑三「米国ペンシルバニア州白痴院第45年報『書評』」,『東京独立雑誌』29号, 1899年.（『全集』第7巻, Pp.44-45.）なお, Elwyn Pennsylvania Training School for Feeble-Minded Children.は, 現在では鈴木範久訳の「ペンシルヴェニア州立知的障碍児養育院」が適切と思われる。内村自身はasylum for idiotsに「白痴院」の訳をあて, Institutionは「慈善院」とした。hospitalを鈴木俊郎（岩波文庫）は「病院」, 松沢は「養護院」としている。
(28) 内村鑑三「流窴録」,『国民乃友』233-251号, 1894年.（『全集』第3巻, p.52.）
(29) 内村鑑三「余はいかにしてキリスト信徒になりしか」, 松沢弘陽責任編集『内村鑑三』（日本の名著38, 中央公論社, 1984年）所収. Pp.158-159.
(30) 上掲,（28),（『全集』第3巻, Pp.52－53.）
(31) 上掲,（5),「はじめに」, p.viii.
(32) 内村鑑三「北海道鱈漁業の景況」,「千歳川鮭魚減少の源因」, 1882年,『全集』第1巻.
(33) 内村鑑三「白痴の教育―故ジェームス, ビー, リッチャーズ述」,『基督教新聞』452号, 1885年.（『全集』第1巻, Pp.282-283.）
(34) 上掲,（28),（『全集』第3巻, Pp.65-68.）
(35) 奥田三郎・井口チドリ「観察記録より」,『治療教育』2, 小金井学園発行（大泉溥編 日本の子ども研究 第8巻 奥田三郎の子ども研究と治療教育方法論 クレス出版, 縦文字 21-25, 2009年)。医師の奥田が, 小金井学園の女性指導員井口チドリを高く評価して,「人生を知悉して, しかも穏和な, 人情深き五十前後の婦人の与へる教育的効果がどれほど大きいかは, 治療教育の如き場合, 特に顧慮せらるべきであると信ずる」と述べている。
(36) 森有正「木々は光を浴びて」, 1972年, 二宮正之編『森有正エッセー集成5』, p.052, 067.ちくま学芸文庫.1999年.
(37) 上掲,（29), p.164.
(38) 上掲,（29), 第7章, p.169, および第10章「キリスト教国の偽りない印象―帰国」, p.118.
(39) 上掲,（29), p.172.および, p.218.
(40) 上掲,（29), 第8章, p.190.
(41) 上掲,（29),『全集』第3巻, p.60.
(42) 内村鑑三『求安録』, 1893年,（松沢弘陽責任編集『内村鑑三』, 日本の名著38, 中央公論社, 1984年, 収録）Pp.227-320.
(43) 上掲,（9),「『ジャップ』から親友に」, Pp.54-57.
(44) 中村俊定校注『芭蕉俳句集』（岩波文庫, 1970年）にこの句は収録されていない。新渡戸稲造『武士道』（英語版, BUSHIDO, THE SOUL OF JAPAN.1899.邦訳矢内原忠雄, 岩波文庫, 1938年.), 第11章「克己」（self-control）には「諺に言う,『口あけて腸見する柘榴かな』」（p.102）とある。ほぼ同じ時期に内村と新渡戸がこの句を引用していることに注目したい。
(45) 上掲,（10), 解題, p.33.
(46) 上掲,（10), 解題, p.34.

(47) Buddhism and Christianity, (『全集』第7巻, Pp.382-386.) 38歳の内村はこの英文論文で,「仏教とキリスト教はまったく世界的な宗教であり, 賢者の宗教である」と述べている。
(48) 上掲, (6),「法然・親鸞への関心」, Pp.119-120. 娘ルツの死を経て50代の内村は法然, 親鸞の思想に近づく。
(49) 内村鑑三 (鈴木範久訳)『代表的日本人』,「ドイツ語版後記」(岩波文庫, 1995年), p.184.
(50) 糸賀一雄「発達保障という考え方」(『糸賀一雄著作集』Ⅰ.「第一部 この子らを世の光に」, Pp.165-170. 日本放送出版協会, 1965年)。糸賀はわが国の「発達保障の思想」提起の先駆者である。
(51) 上掲, (5),「あとがき」, p.300.

Philosophy of Human Development Support by Kanzo Uchimura

Masayuki MAMIYA

Key Words

rethinking Kanzo Uchimura's philosophy, attendant experience at Elwyn, re-evaluation of "Ruzanroku", philosophy of human development support, universal view of education

Abstract

In commemoration of the 150th anniversary of the founding of Hokkaido University, the life and achievements of Kanzo Uchimura (1861-1930), an outstanding scholar and a graduate of Sapporo Agricultural College (class of 1881), are discussed as "Issues in Pedagogy Today" from the perspective of the formation of his philosophy.

First, the author summarizes previous discussions of Uchimura's life and thought. And next, examines Uchimura's "Crisis of growth" (Erikson, E.H.) from the standpoint of understanding his philosophy of human development support, tracing it back to the problems of his troubled family environment.

Uchimura went to America at the age of 24 after the breakup of his first marriage and gained experience as an attendant at Elwyn's Training School for Feeble-Minded Children. This valuable experience enabled him to publish "Ruzanroku" after "Kyuanroku", a record of six years of contemplation after his return. Through such self-reflection and self-insight, it became a record of his "own inner experience" and is considered as a historical book on education and welfare. His philosophy of human development support, based on his universal view of education, must be considered one of the "greatest legacies for coming generations".